

## 平家物語における「語り」試論

——靈驗譚・前兆をめぐる——

### 生 形 貴 重

#### はじめに

平家物語がその作品内部に複雑で多様な要素を取り組みながらも、なお和漢混淆文というすぐれて独自の文体でそれらを統一していることは既に言われてきたところである。そして細部にわたって検討すれば、その多様な文脈の統一が長い平家物語の流動と展開——「語りもの」という集団的な創造と享受のくり返し——の中でなされてきたことも、今日多くの研究によって明らかにされつつある。しかし、平家物語が、平曲という「語り」の芸能として流布し広範な階層の中で享受され長く育まれてきた前提には、その作品（詞章や内容など）が芸能として流行することを可能にするすぐれた文学性を備えていることを必要とするであろうし、また更に「語り」の芸能としてあることによってその文学性をより豊かなも

のにしてゆくことも予想されるように、平家物語の文学性とその「語りもの」としてのあり方との関連は非常に複雑であり、今日でもいまだに理論的には十分解明されていない研究課題であるといえよう。平家物語の成立にとって、既に「行長」というすぐれた個性の存在が不可欠であるにしても、一方でそれと等質の重みを持つ、在地の民を成立の基盤とするであろう「語り」の伝統との複雑なからみあいや、また平家物語がその成立の当初から琵琶法師の芸能として広められたということと、平家物語の諸本のそれぞれのあり方との関係も、十分に解明されざる点が多くあるといえよう。

勿論、原平家作者の積極的な歴史への展望を持った思想<sup>①</sup>、即ち「無常観」という「盛者必衰」の理法——滅びゆくものへの諦観——が、平家物語の骨格として本質的な意味を持ちつつけていることは言うを待たないであろうし、また原平家が「覚一本」に典型的

にみられる語り本に比較すれば、より簡潔で叙事的・記録的な形態を有していたであろうことは言われてきた。<sup>③</sup>しかし、問題はその原平家的なるものを突き崩しながらも、そして本来的であろう形態に比較すれば、作品としての分裂・破綻を指摘されねばならぬ危険を内包しつつも、なおかつその作品的世界において、相続く戦乱という中世の歴史的状况と、生死の狭間に潜む人間の真実な諸相——苛酷な中世的現実と人間の「生」の解放という文学的課題<sup>④</sup>——を多様にしかも感動的に描き上げた、<sup>⑤</sup>「語りもの」という内在的な文学性がクローズ・アップされねばならないということである。

今日まで、平家物語の長い流動と展開による文学的達成については、いわゆる「作者の世界観におけるリアリズムの勝利」というリアリズム論の援用によって、平家物語の成立があたかも作者の一回的な創作行為でなされたかのように説明されてきたくらいがあった。それは古典としての平家物語の姿の一面面を、近代的な文学観によってとらえたということができるかも知れないが、一方で古典が持つところの特有な前近代的な構造や方法の可能性や価値を捨象したことも指摘しなければならない。

本稿は、そのような平家物語の内在的な文学性である「語りもの」というあり方の意味を追求する手がかりとして、今日まで看過されてきた平家物語における靈験譚や前兆を検討し、そのような前

近代的な発想が作品内部においていかに有効に機能しているかをみ、さらにそれが「語り系」の特徴の一つであることを明らかにしようとするものである。と同時に、そのような前近代的な呪術的・宗教的・習俗的な思想が、平家物語を貫く因果応報の論理構造の基盤として存在することをも述べようとするものである。

## (1)

平家物語を内的に支える文学的方法の中心には次の二つの要素が考えられる。一つは、平家物語の全体を貫く記録的方法に根ざした叙事的精神と呼ぶべきもので、それは平家物語の文体を貫いている漢文体の記録的叙述の中にかがいがい知ることができる。平家作者の歴史への冷徹な眼なり精神なりというのがその基底をなしている。そしてもう一つの要素は、前者とは異質な、口承的素材<sup>④</sup>である。徒然草第二百二十六段の「武士の事・弓馬のわざは、生佛、東国の者にて、武士に問ひ聞きて書かせけり」という記事は、資料としての価値に問題があるにせよ、平家物語の成立における、この二つの要素のあり方を象徴的に言ったものであろう。また柳田国男氏の「有王と俊寛僧都」<sup>⑤</sup>、谷宏氏の「平家物語の形成と本質」<sup>⑥</sup>、西尾光一氏の「平家物語における文学的人間像の成立」<sup>⑦</sup>、むしゅのこうじ・みのる氏の「いくさがたりについて」<sup>⑧</sup>、水原一氏の「平家物語の形成」

等の研究は、後者についての鋭い学問的考察である。

しかし、この二つの要素——記録的方法に根ざした叙事的精神と口承的素材——は異質な性格のものであって、それらが一つの統一した作品的世界の創造に機能してゆく過程はいまだ文学論的に十分説明はされていない。いったいに、語りとは、特定の地における・特定の人物に関しての・特定の事件なり事象なりを語るものであり、そういう意味で地域的・集団的な性格を持っており、個別的に存在する。それに対して前者の記録的方法に根ざした叙事的精神といふべきものは、作者の個性的な意識に根ざしているといえる。こうした異なる要素の関係について、益田勝美氏は「語りもの文芸の社会性」において、「いくさばなし」によって自己内部の価値体系の顛覆してゆくのを経験した主体の中に、「いくさがたり」が導入される過程が平家物語の成立にとって重要であるという発言をされた。氏の論は、個別的な「語り」が、平家物語の世界の中で普遍的な文学課題を荷うものへ上昇してゆくという点において非常に貴重な論考であるが、具体的に平家物語の流動と展開の中で、「いくさがたり」に限らず、口承的素材と作者主体との関係が、氏の述べられた論理にあてはまりうるか否かという点においては疑問である。

平家物語の形成・成立過程における、この異なる方法の関係は、

実際の平家物語の作品的世界が、どのような思想と方法で形作られているかを分析してみるところから問い直されねばならない。

## (2)

そこで、平家物語の世界がどのような歴史的・社会的事件を、いかなる思想と方法で一つの作品的世界に構成しているかを見てみよう。

平家物語に描かれている歴史的・社会的事件を整理してみると次のようになる。

- (a) 平氏の興隆・王朝的世界の混乱
- (b) 鹿谷事件・山門騒動
- (c) 治承三年の清盛のクーデター
- (d) 頼政の蜂起
- (e) 福原遷都・頼朝の蜂起
- (f) 清盛の死去
- (g) 義仲の都への進撃・平氏の都落
- (h) 平氏の太宰府落・義仲のクーデター
- (i) 頼朝軍の義仲追討・平氏追討
- (j) 義経軍の平氏追討
- (k) 頼朝の義経追討・平氏殘党の根絶

平家物語がこれらの作品的素材である諸事件を、一つは漢文体の記録的叙述で描いていることは既に述べた。それはこれらの諸事件の顛末を、<sup>レ</sup>時間性<sup>レ</sup>という秩序によって一定の脈絡に統一し、作品の時空の骨格を形作るという大切な機能を果している。しかし、平家物語がそうした叙事的・記録的なあり方から自らを峻別しているのは、たとえばその作品構造を、清盛・俊寛・重衡・維盛……等、その変革の季節に生きた典型的なさまざまな人間の運命によって構成していることにありありと読みとれるように、生死常ない、というよりはむしろ死によってしか人間の歴史の本質や人間的資質が燃焼されないという、残酷でさえある中世の歴史の現実と、そこに生きる人間の根底に潜む真実を追求するところにあるといえよう。そして、それらの治承・寿永の内乱の中で生まれたさまざまな事象や人物に関する口承的な伝承が、平家物語の成立に不可欠な素材となったことは既に述べたとうりであるが、その作品的素材の中でさまざまに生き死にする人間群像を支配する運命を創造することは、先に述べた記録的叙述が作品的時空の骨格を形作るのと同様に重要である。即ち、諸々の事件や人間を次々と新しい状況へ推し進めてゆく必然性——運命——を作品の中から分析し考察してゆくことが必要となる。今日までそれはあの序章にみる「盛者必衰の理」の理法——一種の因果律——であると言われてきた。そして

#### 平家物語における「語り」試論

て、そこに作者の思想を典型的に見出してゆくことが定説化しているが、具体的に作品内部における因果律の実際から平家物語の思想を帰納するということには意外と無配慮であったといえよう。序章の論理は即抽象化されてはならず、作品の因果律を支える実際の様々な思想を考察する上で論じられねばならないのではないだろうか。

### (3)

さて、ここで先に整理した平家物語の作品的素材である(a)~(k)の諸事件が、いかなる構想の下で作品の世界に位置づけられているのかをみてみる。(a)~(k)のそれぞれは独立した事件であって、<sup>レ</sup>時間性<sup>レ</sup>の下に秩序づけられるのみでは作品の世界を構築しえない。それがいかなる論理によって一定の作品としての脈絡を保ち、平氏一門の栄華からあまりにも速かな滅亡を必然化し、さまざまな人間の活躍する背景としての世界を創り出しているかを考察しなければならぬ。

たとえば藤原成親の官位に対するすさまじい妄執と平氏一門の抬頭との摩擦から生じた「鹿谷事件」を平家物語はいかに描いているか。陰謀の失敗から事件に関与した人々の悲惨な運命を支配しているものは何であつたらうか。

平家物語における「語り」試論

成親の祈願成就の祈りに対して次のような前兆が起きる。

男山の方より山鳩三飛来て、くひあひてぞ死にける。鳩は八幡大菩薩の第一の仕者なり。宮寺にかゝるふしぎなしとて……

その他、賀茂別雷神神社の神の和歌、落雷、が描かれ、陰謀の失敗が「神非礼を享給はず」という必然性によって説明される。

また「山門騒動事件」の背後には、山王権現の神慮が存在していることを、嘉保二年の源義綱の円応殺害事件にまつわる関日師通児唄の例で説明している。「願立」

右のような靈験譚・前兆は、平家物語の全編に散在し、諸事件の展開（物語のストーリー）を説明し因果律の下で統一してゆく。とりわけ、重要な事件の展開部にはそのことが顕著にみられる。先に整理した(a)~(k)に沿って平家物語における靈験譚・前兆を整理すると左のような表が得られる。

(a)	号	作品的素材としての歴史的・社会的事件	靈験譚・前兆の例 ( )内は、巻・章段名	備考	「語り系」三本の校異
	記				
平氏の興隆	熊野権現の利生 (一・「鱸」)	熊野権現			
	×	本代本			
	×	平松家本			
	×	鎌倉本			

(f)	(e)	(d)	(c)	(b)
清盛の死去	福原遷都	頼政の蜂起	治承三年の清盛のクーデター	山門騒動 鹿谷事件 王朝の世界の混乱
●二位殿の夢(六・「入夢道死去」)	●さまざまな物怪による前兆(五・「物怪之沙汰」)	●龜の騒動による前兆(四・「龜之沙汰」)	●重盛の熊野詣にまつわる靈験(三・「醫師問答」)	●成親の祈願と、さまざま前兆(一・「鹿石清水八幡谷」)
●青侍の夢による前兆(二・「(〃)」)	●ねずみの巢による前兆(三・「(〃)」)	●地震による前兆(三・「法印問答」)	●大 火(二・「内裏炎上」)	●山王権現の神慮(一・「願立」)
八幡大明神	陰陽思想	陰陽思想	人々の夢	白山妙利権現 大八王子権現
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○

	(g)	(h)	(i)	(j)
	義仲の都へ の進撃 〔嘆聲〕 ●城太郎の怪死（六・大風・雷 黒雲）	平氏の太宰 府落 ●宇佐宮での大臣の夢想と歌による前兆（八・緒環）	義経軍の平 氏追討 ●住吉神社の鎬矢出現の靈驗（十一・志度合戦） ●地名による義経勝利の前兆（十一・鶏合壇浦合戦）	義経軍の平 氏追討 ●熊野権現前での鶏合壇浦合戦の靈驗（七） ●壇浦合戦での白旗出現の靈驗（十一・遠矢） ●いるかの出現による平氏滅亡の前兆（七）
	仏罰・雷 大風・雷 黒雲	宇佐八幡	住吉大明神	陰陽思想
	○	○	○	○
	○	○	○	○
	○	○	○	○

平家物語における「語り」試論

(k)	頼朝の義経 追討・平氏 殘党の根絶	怨霊思想	怨霊思想
	●大地震による前兆（十二・「大地震」） ●平氏の怨霊による義経の涸落（十二・判官都落）	○	○
		○	○
		○	○

（右の表における靈驗譚・前兆の類例は、平家物語の作品的世界において非常に重要な叙述展開の部分に関してのみ抽出したものである。その他、たとえば鬼界嶋の流人達の運命等、細部にわたって検討すると、五十余りの類例が指摘できる。）

右の表にみられるように、平家物語の作品的世界の背後には、既に述べたように記録的方法に根ざした叙事的方法とともに、内乱における諸事件の顛末を因果律によって確認してゆこうとする方法の存在することががわかれる。それは律令制的な価値観によってもはやとらえきれなくなった末法の現実を、それでもなお新たな因果律という視座で説明し意味付けてゆく。靈驗譚や前兆は、そのような末法の現実においても、やはり因果応報の理法（無常観）の貫徹することを確認し、諸事件の顛末を事実譚として意味付けることによって作品的世界における有機的連関を獲得してゆくきわめて文学的な想像力・創造力であるといわねばならない。そして、それらの靈驗譚や前兆の基盤となった思想は、右の表にみられるように、必

ずしも仏教思想に全てがよっているとはいえず、在来の思想を土台とした非常に複合的な呪的宗教的な思想を含んでいるものであったと考えられる。

## (4)

今その複合的な在来の呪的宗教的思想について検討を加えてみると、それぞれの類例を分類するならば、神仏に対する信仰（熊野権現・八幡大菩薩・厳島大神・春日大明神など）、怨霊思想、陰陽思想、俗信等の、古代的・呪術的習俗であるといえよう。そのような思想が平家物語の靈驗譚や前兆を支えながら、平家物語に多様に入り込んでいるのであるが、具体的にそこから表出される靈驗譚・前兆は、むしろその不思議さや非日常性への驚きに重点があり、またフィクションであることをその性格としている。そしてまた、それらは相互に何らかの脈絡を持つものではなく、まして平家物語の叙述にみられる歴史性とはかかわりがたいものであろう。或いはまた、それぞれの靈驗譚・前兆は作者個性のものではなく、集団的な感性や思想に根ざしているといえよう。

たとえば先の表の(i)における住吉神社の鏑矢出現の靈驗譚は、作者の固有な思想から創作されたものでなく、「玉葉」(元暦二年二月二十日の条)に次のように記されている。

自<sub>レ</sub>住吉社<sub>ニ</sub>進<sub>ニ</sub>奏状<sub>ニ</sub>云、去十六日自<sub>レ</sub>宝殿<sub>ニ</sub>神鏑指<sub>ニ</sub>西方<sub>ニ</sub>飛去了、神<sub>ノ</sub>管<sub>ノ</sub>聞<sub>ク</sub>之<sub>云々</sub>突希有事也(傍点筆者)

或いはまた、(j)の白旗の出現によって平氏の滅亡を必然化し、人間には及びがたい超越的な力の存在することを述べる箇所も「吾妻鏡」(元暦二年四月二十日の条)における梶原景時の書状に

次白鳩二羽、翻<sub>ニ</sub>舞于船屋形上<sub>ニ</sub>、当<sub>ニ</sub>其時<sub>ニ</sub>、平氏<sub>ノ</sub>宗人<sub>ノ</sub>々々入<sub>ニ</sub>海底<sub>ニ</sub>、次周防国合戦之時、白旗一流出現于中虚、暫見<sub>ニ</sub>御方軍士眼<sub>ニ</sub>前<sub>ニ</sub>、終<sub>ニ</sub>収<sub>ニ</sub>雲膚<sub>ニ</sub>畢<sub>ニ</sub>。

とあるように、これらの靈驗譚・前兆は、在来の呪術的宗教的な集団的な思想であって、それらは平家物語の口承的素材の基盤をなす思想でもあるといえる。つまり、それらの靈驗譚・前兆の表現は、古代から中世にかけてのさまざまな説話集における表現と共通しており、そういう点からもまた靈驗譚・前兆の基盤をなす複合的な在来の呪的宗教的思想は、平家物語を内的に支える方法の重要な要素である口承的素材の固有な思想であり、それらは階層のけじめを越えた集団的な思想でもあったといつてよいだろう。

## (5)

さて、ここまでに於いて平家物語における靈驗譚や前兆が、作品的素材としての治承・寿永の内乱の中で生じたさまざまな事件

を、前近代的な一種の因果律で一定の脈絡の下に統一し、独自な作  
品的世界を創造していることをみてきた。それはかつて石母田正氏  
の

しかし運命が人間の歴史を支配する具体的な仕方についての考  
えになると、それは事態が完了した後から、経験や歴史にたい  
しておこなわれた解釈や反省に過ぎない。運命の支配を具体的  
にしめすのはたとえば神々の託宣であるが、平氏が滅びるだろ  
うという託宣も、また天下が平氏から源氏へ、さらに藤原將軍  
へ移るだろうという夢想も、そのように事態がなってしまうて  
から、つくり出したものであることはいうまでもない。<sup>⑤</sup>

という否定的評価とは反対に、未曾有の民族的な歴史体験を経た中  
世人の積極的な彼等固有の歴史把握の方法であり、かつまた平家物  
語における前近代的な固有の文学的想像力・創造力であると評価さ  
ねばならない。しかし、先にみたようにそれらは集団的な思想で  
あり、フィクショナルな性格を持っており、平家物語の叙述の一方  
の骨格をなす記録的方法に根ざした叙事的精神とはむしろ相反し  
あうものであって、それらを統一し有機的な連関をもった自律した  
作品的世界に創造するには、それらを内的に統一する内在的な文学  
性が問われねばならない。

そこで注目に値するのは、先の表にあげた靈驗譚・前兆の「増補

#### 平家物語における「語り」試論

系」と「語り系」とにおけるとりあつかいの差異である。二、三の  
典型的な例をここにあげてみる。

まず(c)の「鬘」の例であるが、これは「鹿谷事件」が完了し物語  
が新局面を迎える所に位置しているが、「鹿谷事件」の終末<sup>⑥</sup>

か様に人の思歎きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ  
〔僧都死去〕

という一文(怨霊思想が根底にある)をうけ、次の事件展開(重盛  
の死去と清盛のクーデター)の起きることを予言するのであるが、  
史実では治承四年であるところを一年早めるといふ虚構によって、  
また人智には及びがたい現実世界を支配する運命を、その固有なお  
もしろさを媒介にしながら作品化しているといえよう。しかし、  
「増補系」の「延慶本」<sup>⑦</sup>・「長門本」<sup>⑧</sup>では、この記事を重複して治承  
三年と四年の箇所記してあり、「四部本」<sup>⑨</sup>においては史実を重ん  
じて四年としている。富倉氏が、

一方において「四部合戦状本」に見るように、治承四年のこと  
として平家物語に採り入れられ、一方においては、語りもの系  
の平家物語に見るように、治承三年のこととして採り入れられ  
たと見るのが穏当と思うのである。<sup>⑩</sup>

と指摘されるように、「増補系」と「語り系」では明確な性格の相  
異があり、「語り系」の記述は、虚構によって作品的世界を、異質

な文脈や叙述の方法との有機的な連関を保ちながら、立体的な作品的世界へと創り上げているといえる。

次の例としては(四)の「城太郎の怪死」があげられる。これは清盛の死に前後して全国的な源氏の蜂起が、年代記的叙述の集中的な表現で語られる所に位置しているが、とりわけ城太郎の死は、その緊張した状況描写とあいまって、平氏一門が滅びてゆくべき運命にあることを、その怪奇な独特の想像力を通してうったえかけてくる。

夜半ばかり、俄に大風吹、大雨くだり、雷おびたゞしうなッて、天霽て後、雲井に大なる声のしはがれたるをも(シ)て、「南閻浮提金銅十六丈の慮遮那仏、やきほろぼしたてまつる平家のかたうどする物ここにあり。めしとれや」と三声さけんでぞとをりける。……あくる十六日卯剋に城をいでて、わづかに十余町ぞゆいたりける。黒雲一むら立来て、助長がうへにおほふとこそ見えけれ、俄に身すくみ心ほれて落馬して(シ)げり。輿にかきのせ、館へ帰り、うちふす事三時ばかりして遂に死にけり。飛脚をも(シ)て此由都へ申たりければ、平家の人々にさきはがれけり。(「嗚聲」)

年代記的叙述とこの説話的な想像力は一体となって平氏滅亡に集中し、作品の世界をすぐれた叙事詩的世界へと上昇させていることが知られる。彼の死については「吾妻鏡」(養和元年九月三日の条)

に、

越後守資永号<sub>ニ</sub>城四郎<sub>一</sub>任<sub>ニ</sub>勅命<sub>一</sub>一 駈<sub>ニ</sub>催当国軍士等<sub>一</sub> 擬<sub>レ</sub>攻<sub>ニ</sub>木曾冠者義仲<sub>一</sub>之<sub>ニ</sub>处<sub>一</sub> 今朝頓滅 是<sub>ニ</sub>蒙<sub>ニ</sub>天譴<sub>一</sub>一 歟。(傍点筆者)

とあり「何らかの『天譴』という巷説もあつたことを伝えているようにも考えられる」と富倉氏も指摘されるように、この記事も内乱の中の一つの口承的素材であつたように思われる。しかし「増補系」においては、たとえば「四部本」では、怪死の記事は該当の箇所になく以前に記されており、該当の箇所の記述は、

六月十五日自越後国以早馬申 去二月当国住人城太郎資長遁木曾冠者率六万余騎欲越信濃国之夜前朝剋大郎中風失

というように、「玉葉」「吉記」にみられる病死説という、より史実に近い態度で記され、先にみた「語り系」の叙事詩的世界は希薄である。また「延慶本」「長門本」においても、怪死であることには触れながらも、しかし、

……唯召とれやと罵<sub>ル</sub>声のしければ、これをき<sub>ム</sub>ける時より、城太郎中風にあひ、片身すくみてつや<sub>ク</sub>はたらかねば、思ふことをもいひ置かず、男子三人女子一人有けれども、一言の遣言にも不<sub>レ</sub>及、其日の酉の時ばかりに死にけり、怖しなど云ばかりなし(「長門本」による。傍点筆者、「延慶本」もほぼ同

文)

という迫力のない、イメージの乏しい記述であって、またその前後の煩雑な叙述のために、「語り系」にみられるようなあの平氏滅亡へと集中してゆく緊張した世界はみられない。

その他、順序が前後するが(f)の「二位殿の夢」などもこの一例にあげられる。この発想(墮地獄のこと)は、「靈異記」などからひきつづいてきた説話的なものであり、またその内容も「古事談」にみえる源義家の説話と非常に類似している。しかし「語り系」諸本では、「入道死去」のすさまじい文学的イメージをもち上げるために「二位殿の夢」として、叙述の中に内的な連関を保ちつつ効果的にとり入れられている。しかし「増補系」では、かかる説話的な口承的素材は「入道死去」の後日談として描かれ(たとえば「四部本」では「西八条女房」の夢として、「延慶本」では「入道ノ仕給ケル女房」の夢として、「長門本」も同様)、「入道死去」の叙述の中で変質し一体となって作品的世界を創り出すという機能を果していないのである。

このような「増補系」と「語り系」との靈験譚・前兆のとりあつかいの差異に明白にみられるように、平家物語の作品的世界を内的に統一してゆく力は、その「語り」の文学としてのあり方に求められると考えられる。少くとも「語り」の文学としてのあり方なくして平家物語の文学的達成はありえなかった。

平家物語における「語り」試論

(6)

平家物語における「語り」という内在的な文学性が作品的世界を豊かなものにしてゆく具体的な現れ方は、「語り系」諸本間の校合を通してうかがいえる。たとえば「入道死去」の章段について概観するとき、初期諸本の一つといわれる「屋代本」の章段構成と「語り系」の完成と評価される「覚一本」のそれとを比較すると次のような差異がみられる。

	屋代本	覚一本
(1) 廿七日入道の発病	(1) 同上	(1) 同上
(2) 都の騒動	(2) 同上	(2) 同上
(3) 異常な熱病と病状の悪化	(3) 同上	(3) 同上
(4)* 社寺への祈願(二位殿の夢との関連なし)	(4)* 治療のききめがなく、さながら焦熱地獄であること	(4)* 治療のききめがなく、さながら焦熱地獄であること
(5) 二位殿の夢	(5) 同上	(5) 同上
(6)* 潤二月二日の遺言	(6)* 二位殿の夢におどろき、社寺への祈願	(6)* 二位殿の夢におどろき、社寺への祈願
(7)* 治療のききめがないこと(焦熱地獄のことなし)	(7)* 潤二月二日の遺言	(7)* 潤二月二日の遺言
(8) 同四日入道あつち死・都の騒動	(8) 同上	(8) 同上

(9) 宿運のつきたこと (簡略な表現)	(9) 同上 (抒情的・長文化)
(10) 火葬 (「をたぎ」なし) 納骨 (「経の嶋」なし)	(10) をたぎでの火葬・経の嶋への納骨
* ** * 「無常感の表白」なし	(11) * ** * 「無常感の表白」

右の表にみられるように、「覚一本」は、章段の内部における叙述を再構成し、たとえば「二位殿の夢」のような説話的記述を「社寺への祈願」との脈絡の下に統一しながら、この章段をすさまじい文学的イメージの豊かなものへと高めている。そのことよって清盛の人間像は、無間の地獄へ墮してゆくという古代的な罪業観念のりこえて、そしてまた作者の「罪ふかけれ」という評価をものりこえて、古代を打ち倒してゆく中世変革期の典型的な英雄像へと形象されてゆく。とりわけ「覚一本」では、

さしも日本一州に名をあげ、威をふる(へ)し人なれ共、身はひとゝきの煙となつて都の空に立ちのぼり、かばねはしばしやすらひて、浜の砂にたはぶれつゝ、むなしき土とぞなり給ふ。

(「入道死去」)

という、英雄清盛の死を抒情に吸収しながらも、なお歴史を支配する運命のきびしさを謳いあげる無常感の表白があることは「入道死

去」の感動の中から、一種の芸術的認識、即ち平家物語という芸術を通して認識された文学としての思想——無常観——が獲得されているということを示している。

「覚一本」のこの文芸的な達成(勿論、一方では初期諸本の持つ抒情へと屈折することの比較的少ない叙事的な歴史文学としての可能性を、「語り系」の本文の展開は十分育んでいるとはいえない側面もあるが)は、しかし「覚一本」独自のものでは当然あるはずはなく、「屋代本」との中間に位置する諸本をも考慮して検討してみれば、たとえば「鎌倉本」において既に右に引用した無常感の表白とはほぼ同文の本文が語られていることからうかがえるように、長い平家物語の「語り」の展開の中で磨かれ鍛えられながら築き上げられたものと考えねばならない。

### おわりに

平家物語の成長期にあたる十三世紀から十四世紀にかけての平曲享受の文献資料がとほしく、初期平曲の実態が今日の段階では不明な点があるとしても、平家物語の文学としてのあり方の本質は、たとえば平家物語が「六条御堂」「矢田地蔵堂」「五条高倉薬師堂」といったさまざまな階層の人々の集まる解放された在地の民の集団的な「場」を中心に語られてきたことがうかがえるように、中世のさま

さまざまな階層を含んだ民衆的・集团的な「場」においての「語り・聴く」文学というあり方の中に求められる。琵琶法師をとりまく「場」——一種の芸術的な空間——においての創造と享受の全体が、平家物語の文学としての存在・価値・機能を全的に成立させているからだ。靈験譚・前兆などという彼等独自の歴史に対する把握のし方や一種の説話的な想像力が作品的世界の創造に有効に機能しえたのも、そして彼等の思想——複合的な在来の呪的宗教的思想——が作品の運命観の論理的構造に関りえたのも、そうした「場」の構造なくしてありえないと考えられよう。あるいはまた、平家物語の文芸的な達成が、平曲の隆盛期に相当する南北朝の内乱期においてみられることから、平家物語の文学としてのあり方の本質がその「語り」にあったことは疑いえない。戦禍の絶えぬ世であればこそ、いっそう切実に過去の民族的な変革の季節における歴史を語り聴くことを要求し、またその要求の充足によって、失われた人間性を回復してゆくという文学・芸術としての機能を「語りもの」としての平家物語は持っていたのである。

本稿では、平家物語の内部を貫いている「語り」が、作品の世界を内的に統一し上昇させてゆくことを、まず靈験譚・前兆を手がかりとして考察した。しかし、作品的世界における歴史とさまざまな人間群像の壮大なダイナミックなせめぎあいから浮かびあがる歴史

と人間の真実への文学的追求はこれからの課題として残っている。「語り」の文学としての平家物語の多角的な分析と研究を今後の課題としたい。

(注)

- ① 永積安明氏「平家物語の思想・序章表現をめぐって」(「中世文学の成立」所収)
- ② 永積安明氏「平安物語の形成——原平家の問題をめぐって——」(「中世文学の展望」所収)
- ③ 谷宏氏「平家物語の女性について——「小宰相」と「灌頂巻」——」(「国文学」第一巻・五号)は、この文学的課題を鋭く指摘している論考である。
- ④ 口承的素材として考えられるのは、平家物語の成立にかかわったさまざまな説話や語りであるが、これらの口承文芸上の概念は、土橋寛先生「カタル・モノガタルの語義」(「古代歌謡の世界」第五章)および「説話文学と歌謡」報告要旨」(「説話文学研究」第四号)によった。
- ⑤ 「定本柳田国男全集」第七巻所収
- ⑥ 「日本文学研究資料叢書・平家物語」所収
- ⑦ 同⑥
- ⑧ 「日本文学」第四巻・一号

- ⑨ 水原一氏「平家物語の形成」(昭和四十六年・中道館刊)
- ⑩ 「国文学」第五卷・七号
- ⑪ 「鹿谷」(岩波大系本・上・一二二頁)
- ⑫ 同⑩
- ⑬ 表の下の諸本は次の本をテキストとした。
- 「屋代本」(佐藤謙三氏・春田宣氏編・桜楊社刊) 底本は国学院大学図書館蔵本
- 「平松家本」(山内潤三氏・木村晟氏編・古典刊行会刊) 平松家旧蔵本の影印本
- 「鎌倉本」(山岸徳平氏・山内潤三氏・木村晟氏編・古典研究会刊) 彰考館蔵本の影印本
- ⑭ 堀一郎氏「平家物語にあらはれた宗教史的要素」(平家物語講座・1)所収)
- 五来重氏「軍記物語と民間信仰」(「解釈と鑑賞」第二十八巻・三号)
- ⑮ 石母田正氏「平家物語」(岩波新書)四十八〜四十九頁
- ⑯ 「僧都死去」(岩波大系本・上・二三九頁)
- ⑰ 佐々木八郎氏「平家物語評議」
- 富倉徳次郎氏「平家物語全注釈」
- ⑱ 「延慶本」は古典研究会刊の影印本を使用
- ⑲ 「長門本」は国書刊行会刊本を使用
- ⑳ 「四部本」は、慶応義塾図書館蔵本の影印本を使用
- ㉑ 富倉徳次郎氏「平家物語研究」一九六頁
- ㉒ 「頃聲」(岩波大系本・上・四二六頁)
- ㉓ 同⑰富倉氏著書
- ㉔ 「古事談」第四勇士・義家死後墮地獄事
- ㉕ 同⑰
- ㉖ 永積安明氏「平清盛——平家物語における——」(日本文学「第六巻・七号」)
- ㉗ 「入道死去」(岩波大系本・上・四一〇頁)
- ㉘ 同②
- ㉙ 「平家物語享受史年表」(「国語国文学研究史大成・平家物語」所収)
- 永積安明氏「平家物語」について(「図書」・一九七二年十一月号・十二月号)